

総合市民センター

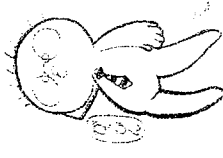
☎(24)9511 福(23)7444
※祝日、年末年始

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！

「日本の古典文学 旅」

+ちよっとウラ話

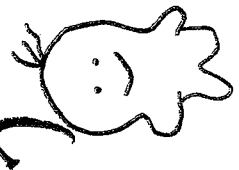
6月5日金、8月7日金、11月13日金、
令和9年1月29日金10時～11時30分
／内容＝日記等の作品を読む事で日
本文化を知る／講師＝伊藤 雅敏先
生／対象＝市内住者／定員＝35人
(申込順)／申込＝4月17日金9時～
電話にて※土日17時まで申込可



藤野 雅敏



「ガビン先生と
楽しく学ぼう」



「日本の古典文学

旅 — ちよっとウラ話 —

16,2

令和八年八月二十時から

共済会館市民ホール

4F

問題です

問一

次の時代を年代にしたら
年数の短順に並び替えてよ。

古奈良

中

平安

中世

鎌倉

室町

安土

桃山

近世

江戸

問二

奈良公園の鹿

春日大社の神使、神鹿

武建植命をけがらちのみこと

白鹿に乗ってやってきた

空島

敷島神社の鹿

空島全体が神の島

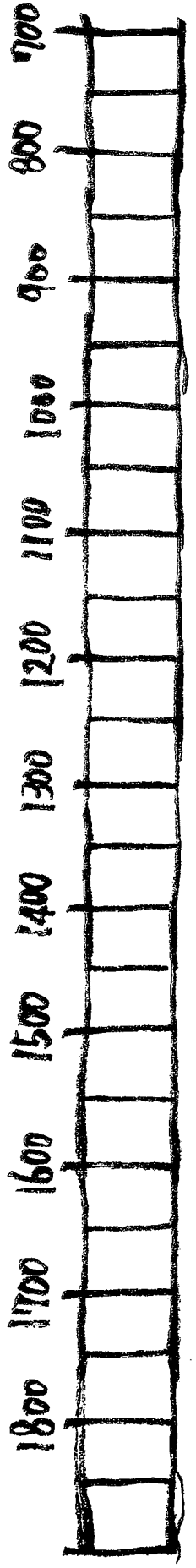
どちらの鹿の数が多いの？

問三

次の姓は何と読むの？

月見里

七部



②

天声人語

〈行着や鳥啼魚の目は泪〉。

芭蕉が「おくのぼろ道」の行脚に出たのは、旧暦の月27日だった。現代なら半月はいい。最近では季節が駆け足だから、旅始めの別離の句に、いまじろを

思ひ浮かべても構わないだろう。▶このとき芭蕉は、数えて46歳。漂泊の年月を重ねてきたが、これからの長旅を無事終えられるのかという不安もあったようだ。覚悟のゆえか。出立にあたって東京・深川の芭蕉庵を人にゆずっている。その時に詠まれた1句が、いまは目にしみる。

①

〈草の目も住替る代もひなの家〉▶小ぢいながらも思ひのしめる草庵に、新たなあるじが入る。頭上でも、古くなった葉にかわって、柔らかな新緑が萌え出している。新旧交代。さて603文字という小ぢな構えの当欄にも、その時期が訪れた▶3年半にわたって3人で続けてきたが、うち2人は今日をもって入れ替わる。あれいゝ月日は百代の過客。時の流れはどしどし進むことを知らない。その早さに驚いている▶この間、世界の混乱は収まるというが、拍車がかった。戦争の惨禍は東欧にどしどし及ぶ、中東にも広がった。民主主義や「法の支配」は土台が揺らぎ、国内外で分断の影が色濃くなっている▶読者の目には、希望という小ぢな明かりを灯せたが、ほいど一息つける庵であったが、ふり返れば心もとないがあたりである。それでも、言葉の力を信じた。春が行く。その風を受けて、明日からは新たな「言の葉」が茂ってゆく。どうも思ひ止めただけでは。

2026・4・30

旧暦 3/27 → 5/16 (旅の日) 46歳出発

③

④
又、此の如く、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

月日は百代の過客にして行かば年も又

旅人も舟の上に生涯をうかぐ馬の江

といえて老をむかふる物は日々旅にして

旅を栖とす古人も多く旅に死せる

あり年もいつかの年よりが山雲の

風にとそはれて漂泊の因ひひます

海濱にとすらん去年の秋江上の破屋に

秋の古葉をうらみたり年も暮春立る

霞の空に白りの関にえんとそら神の物に

つきてつをうらむは道祖神のまねに

あひて取もの手にけがすもふの破をうり

笠の緒付がえて三里に冬すゆるより松島の

目先じにけりてほる者は人に譲り松風が

月日は永遠に旅を續けて行く旅人である
来るこゝなり去るこゝは来る年々もまた同じなうに
旅人である。舟の上で働いて一生を送り
旅人や荷物を運べる馬を
引いて舟をとり老舟を迎える者
毎日の生活が旅である

旅そのものも自分のすみかとしている
国産の道の古人も だんぜん旅中に死んでいる
れもいつのにかいかにやうな雲を吹まはす
私に
風に旅したそそいふて漂泊の影がけがする

近年は
海辺の地方をたづね、半ば、去年の旅
馬場のほらりの旅人なういふ
蜘蛛の糸をたいてスーパリのほらりに
やがて舟も船着いたのだと 新一、年になる
春雷の立ちこめる空をあとに、白河の原を越えたこと
そぞろ旅が旅に

いつにいつをたづね、道程の長く出でに、かゝりかへ
あつて取るものも手につかなく、旅の旅人といふ

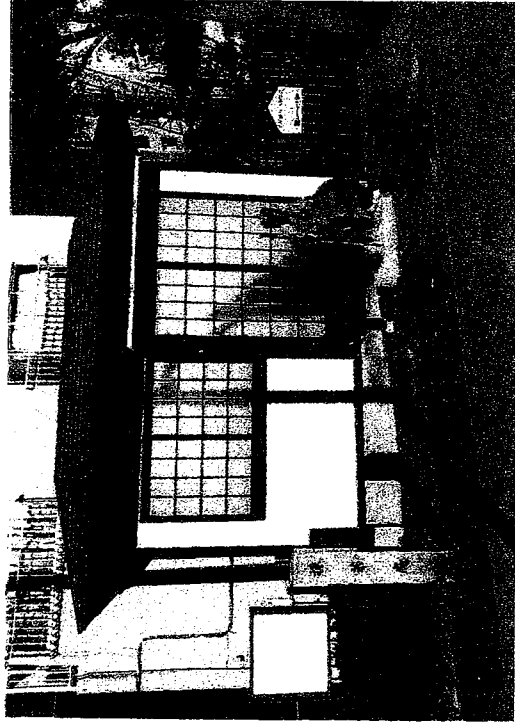
空の船を上げ、たゞ三思に、冬をすゑるし、やうな旅の

旅の舟の来一、たゞ、なんに、かゝりかへ、たゞ、
こゝろで、なんに、たゞ、旅人、人に、たゞ、旅の

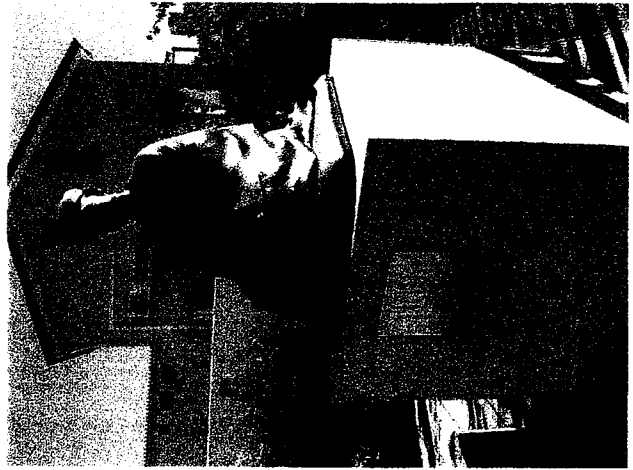


「採茶庵」 ↑左側から

→ 正面



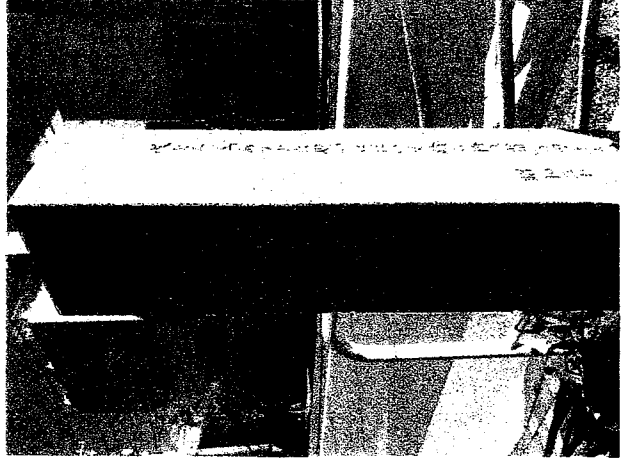
芭蕉記念館内の、芭蕉庵



隅田川沿い 松尾芭蕉



隅田川方面 北を見る



旧新大橋
この付近から千住へ舟に乗る

17

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

胡蝶之舞

別野に移るに
別野は別定 採集者 慶

9

廿早の戸か 住替るやそひなの家

名無きもの屋敷、築いていふ人、其間をまゐるに、此の家にたててあり

面へ句を庵の柱に 懸置

弥生わたるや日

明はの・空 朧々として月には有明にて光

おちるる物より 下はの筆端にひきて

上野 谷中の花の梢又いつたにうしろへ

かきこは通かりしひと舟に乗りて送るしよ

と所にて船もあがれは前途二里のなる

胸にひかりてふちまたに離別望むらん

行春や 鳥啼魚の目は泪

是は立春の初として行道なまかなる人

途かにたたりて後かこのなるかたしき

別荘に移す

自分の欠点を生かす代り、任んで時は運命の二つ

たすかに自分のような世に人とは異なり鑑を飾、た奴になつてゐることも

と詠んで、二の句を禁句にして、面、句を、らる

草庵の柱に懸けておいた

11月27日、28日、29日

明は66年、大いに豊饒、月には明月で、光は

薄いので、ものの宝の峰がすがすがしく見え

野谷の花園に北山園、55号、6号

九龍半島之經濟發展

親一人は、前の晩から集つて今日出に續け

張田川を舟に乗つて送つてゐる 千住とてい

所を解からたぬ。さうして、さういふことを三冊の書に

1949年8月27日

— 100 —

1. 2004年12月25日 2004年12月25日

春はもて行つたといふ 去り行く春の愁は、無心で鳥と魚まで

感ずるとめえ鳥は悲しげになつて、魚の目は涙があふいているようであつた。

一の句を施の句の書き初めとして、脚の第一歩を踏み出した。

また後う書をひかへるよりて歩が速なる。

人々途中に立ち並んで然るの後ろ姿の見えるが、^かつてと見送っている

5

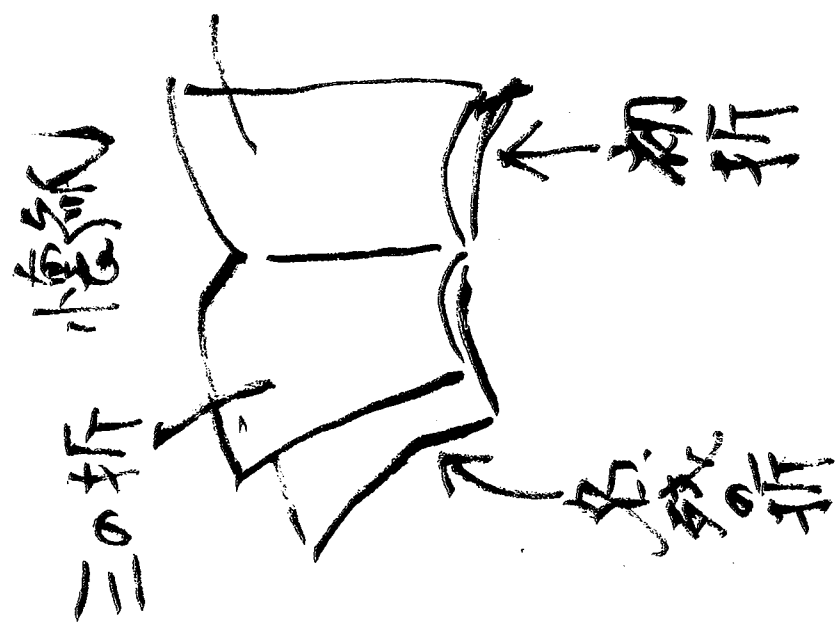
俳句 五七五...十七音

→ 連句...100句連わる...百韻

おもてはちく
面八句

初折表	8句
裏	14句 22
二の折表	14句 28
裏	14句 28
三の折表	14句 28
裏	14句 28
四の折表	14句 28
裏	8句 22

二の折



一 雪はかり山ゆふすむたは
 二 行く水とほく梅はほふ里
 三 川がせにむら柳春みえ
 四 舟やうおほしる明秋に
 五 月ほ霜や露なる夜にのこるん
 六 雪相なく野はら秋はくふけり
 七 なくおのゝもななく草かめて
 八 垣はをとげあはなる道

百
100